

# 『月に吠える』の出版の経緯

日本近代文学文庫から

梅田 順一<sup>E</sup>

『月に吠える』 萩原朔太郎著  
北原白秋序 室生犀星跋 田中恭吉、恩地孝四郎挿画  
アルス刊 大正 11 年 3 月 23 日 再版 定価貳円五拾銭  
四六版 アンカット 厚紙表紙 函入 函及び表紙装丁 恩地孝四郎  
献呈署名入 「淀野隆三君の為に 萩原朔太郎」  
明治大学図書館請求記号 154/H3-12/B/L

## 1 はじめに

明治大学図書館和泉図書館には、明治期から昭和戦前期にかけた文学作品の初版本を中心にコレクションする「日本近代文学文庫」がある。蔵書は 6000 冊を越え、その中にはきわめて貴重な資料が数多く存在する。しかし「文庫」の存在を知る人は少なく、利用は稀だ。

後世に残すべき貴重な資料を、大事に保存していくことは必要だが、半永久的に書庫に配架し、収集するだけというのは何か寂しい気がする。たとえ古本屋で売られている文庫本でも、「近代文学文庫」に所蔵されている貴重な初版本であっても、そのページが開かれ読まれること、人の意識にのぼること、日の光を浴びることこそ本の本懐であるはずだ。残念ながら「日本近代文学文庫」は様々な問題を抱えている。貴重な初版本は復刻

<sup>E</sup>うめだ・じゅんいち / 和泉図書館

版と混在して、書庫の一角の近代文学文庫コーナーに普通に排架されており、保存のための特別な設備は何もなく、鍵すらない。また利用も厳しく制限されていて、資料を紹介する機会も少なかった<sup>1</sup>。我々館員はこれから、文庫の環境改善にむけて計画を立て努力を続けていかなければならない。皆さんも少しでも資料、文庫への関心と興味を持っていただければ幸いである。

ここでは「図書の譜」創刊号の奥村氏、中林氏の論考を受けて、日本近代文学文庫の所蔵資料の中から萩原朔太郎の処女詩集『月に吠える』を紹介したい。

## 2 本学所蔵の『月に吠える』

まずはじめに日本近代文学文庫で所蔵する本は、初版本ではなく再版（アルス版）であることを了承し読んでいただきたい。本稿で紹介する『月に吠える』（アルス版）は1997年七夕古書市で購入されたのだが、実は日本近代文学文庫には、既にアルス版の同じ『月に吠える』が所蔵されていた。版の違うものならわかるが、まったく同じものを何故購入したのだろうか。はじめ図書館ではこの本を購入する予定はなかった。この本の存在自体に気づいていなかったのだ。ある日、古書店から図書館庶務課のほうに明大ゆかりの古書が出品されているとの連絡があり、それがこの淀野隆三あて献呈署名入りの『月に吠える』であった。検討の結果、さっそく購入の意思を告げると、依頼された古書店は見事、七夕古書大入礼会で入手してくれた。

無事に手に入った献呈署名入り本は、既に所蔵されていた署名なしの本の、実に5倍以上の値段がついていた<sup>2</sup>。署名（サイン）ひとつで、まったく同じ図書に、これだけの価格差がついたのは驚きだが、それだけ古書的価値、資料的価値は高いことの証明といえる。朔太郎の献呈本は相当数が現存しているが、署名の入れ方は「著者」が、「萩原朔太郎」や「朔太郎」よりもずっと多い。そして献呈先は「謹呈〇〇様」とフルネームで

<sup>1</sup> このような劣悪な環境にあった文庫だが、少しずつではあるが改善されてきている。1998年夏には鍵のかかるスチール書架、ガラスの展示ケースが中央図書館より送られてきた。

<sup>2</sup> 署名無本は25万円だったが、この署名入本は約125万円であった。

書かれたものが一番多く、「様」のところは「兄」や「先生」のものもある。” [1] すると「萩原朔太郎」と記された本学所蔵の署名本は貴重なものといえるかもしれない。

しかし明治大学にとってはそれ以上の価値をもつ。それは献呈者、受贈者の両者が明治大学に関係が深いところにある。献呈署名に「淀野隆三君の為に」と書かれた、淀野隆三といってまず思い浮かぶのは梶井基次郎の友人、全集の編集者であろう。またブルーストの翻訳でフランス文学者として名をあげている。意外と知られていないが、淀野隆三は明治大学文学部教授だった。『明治大学文学部 50 年史』 [2] には次のような記述がある。

淀野隆三先生は、三年東大卒業後、文筆生活を送りながら、しばらく法政大学で教鞭をとったが、家業を継ぐため京都に帰る。戦後上京、佐藤先生<sup>3</sup> の推薦で二十六年兼任講師、翌年四月教授になった。三十八年六月から四十年五月まで人文科研究所所長、三十九年十月から不幸にして病魔におかされて退いた四十年六月まで学部長の重職を務めた。四十二年七月逝去、享年六十三。先生はブルースト研究の先駆者で、佐藤先生と共訳した『スワン家の方へ』の第一分冊を武蔵野書院から上梓したのは、実に六年七月である。この訳業は『スワンの恋』の第一部にあたるが、二十八年、第二部、第三部を加えて、個人訳をし、新潮社の『失われた時を求めて』の第一巻として刊行した。その他、友人梶井基次郎の全集（全三巻、筑摩書房）を編集したが、その綿密な仕事も忘れられない。

後述するが、萩原朔太郎も戦前の文学部文芸科で講師として明治大学で教鞭をとっていたのだから、この『月に吠える』は大学ゆかりのものである。ちなみに二人の出会いは、昭和 2 年 7 月であった。淀野は卒論の準備の為に三好達治と一緒に、伊豆湯ヶ島で結核療養中の梶井基次郎を訪ねた。そこへちょうど萩原朔太郎が梶井基次郎を何の用事か訪ねたのだった。そのときの様子を三好達治が書いている。

---

<sup>3</sup> 佐藤正彰 明治大学文学部教授。仏文学者。日本近代文学文庫には佐藤先生から寄贈していただいた貴重な初版本が、数多く所蔵されている。

後に私たちは萩原さんと伊豆の田舎で初めてお眼にかかる機会を得たが、その時も梶井は熱心に彼の諳んじてゐるそれらの箇所をいくつかあげて、私にむかってと同じやうに彼の嗜好を作者にむかって開陳した。

| 梶井君はどうも妙なところが面白いんだね…。

といささか意外げにまた萩原さん自身それを面白げに聞きとつてゐられた様子を忘れ難い。[3]

意気投合した彼らは、この夏の湯ヶ島で親交を深めていく。淀野隆三は「湯ヶ島の思ひ出など」に、この夏のにぎやかさを書いている。

広津和郎氏夫妻に令息の賢ちやん、萩原朔太郎氏、尾崎士郎氏、宇野千代女史、下店静市氏、三好達治、僕夫婦、これが外来で、この時の土着は梶井一人、これだけの同勢（但し女性は除いて）が、仕事に疲れると、湯本館で飲み、萩原氏のある落合楼で飲み、果てはかういふ旅館では面白くなくて、宿の女中のいはゆる「お茶屋」、即ち、天城の労働者や村の青年の行く小料理屋にまで進出した。[4]

この後、舞台を東京に移してからも二人の親交は続くのだが、この『月に吠える』がいつ献呈されたかについては、残念ながらさだかではない。

### 3 『月に吠える』の出版の経緯

萩原朔太郎 32 歳、処女詩集『月に吠える』を世に出すと、詩壇ばかりでなく文壇方面からも賛辞がなげられ、一躍、新詩人として時代の寵児となった。朔太郎自身も「僕は一躍して詩壇の花形役者になつてしまつた。」[5] と回顧している。雑誌「感情」第 9 号（大正 6 年 4 月）に特集された、「詩集 月に吠える に就て諸名家の言葉」では、高村光太郎が「今までこんなに全体の飽和した藝術を日本でみたことのない気がします。私はまだ詩について何事も公に言はない時に居ますが後に詩の事について書くとき、此の集が實に重要なものであることを感じます。」と述べ、北原白秋は「何といふすばらしさだ。全く私は驚喜してゐる。内容は知ってゐるが装幀の

すばらしさはどうだ。全く田中恭吉はえらい。君はいい人を見つけた。それが君の詩にもっともふさはしい畫を描く人だといふことはわかる。」と絶賛した。また山村暮鳥も「御集の小包到着まだ頁切(カッター)を用ひずして眺めおれり。ひらくことのいとしさに。」[5]と書いているように詩だけでなくその装幀、挿画の素晴らしさも反響を呼んだ。それは朔太郎が「私の経済の及ぶかぎり(貧しいものではあるが)の出費をして、美しい詩畫集を出したいのです。(ワイルドのサロメをピアゼレが描いている。私はああした意味の出版物に非常な同感をもって居ます)」と、以前に恩地孝四郎あてに書いた手紙のとおり詩畫集は完成したからである。

『月に吠える』の刊行は大正6年2月15日附だが、詩集の編集企画は大正5年秋ごろから具体化されていた。12月に入ると朔太郎は、編集作業を神奈川県鎌倉の長谷の旅館海月楼に滞在して行った。詩集のために旅館に長期滞在するのは、経済に余裕のあった朔太郎だからできたことで、贅沢な編集生活だった。東京での実際の編集作業は、無二の親友で雑誌「感情」の同人であった室生犀星と、朔太郎が雑誌「詩歌」に詩を書いていた関係で、白日社を経営、「詩歌」を発行していた前田夕暮が担当した。そのため発行所は、室生犀星の感情詩社と白日社の共版のかたちになっているが、実態は自費出版であったので、費用の捻出には苦労している。結局朔太郎は母に事情を打ち明けて、他のことの用途にしてせびってもらい、文学者嫌いの父をうまくごまかして300円を手にした。

それで漸く詩集が出たわけだが、當時としてもあれだけの挿畫を入れ、あれだけの装幀をした本が、三百圓位でよく出来たものだと思う。この點で今でも出版者の前田夕暮氏に感謝して居る。[6]

「詩集の名は『月に吠える』です。」と12月27日附の北原白秋あての手紙に書いているとおり、このころになって大体がまとまり、書名も決定されたようだ。

「感情」第6号(大正6年1月)の裏表紙には1頁全面広告が掲載されている。「詩集 月に吠える 萩原朔太郎著 序北原白秋氏 跋室生犀星氏 挿繪故田中恭吉氏 装幀恩地孝氏 一月一日發行 正価金九十錢 (中略)發行所 東京市外田端一六三 感情詩社。」また朔太郎はこの号の編

集記事の中でも「私の詩集『月に吠える』は一月元旦に発行する。もう校正をやっている。詩集出版はいろいろ面倒で三年越しに遅れてしまった。」と書い [7] ているとおり、1月元旦に出版する予定だった。しかし実際には遅れてしまっている。予定というのはなにごとでも遅れるのが世の常なのだがその理由は幾つかあるだろう。その中でも大きかったであろう二つの理由が考えられる。

1つは朔太郎が書きあがった犀星の原稿を紛失してしまったことによるものだ。犀星の跋文「健康の都市」の中にも

萩原君。私はここまで書いて此の物語が以前に送った跋文にくらべて、どこか物足りなさを感じた。君がふとしたことから跋文を紛失したと青い顔してきたときに思った、あれは再度書けるものではない。書けても其書いてみたときの熱情と韻律とが二度と浮んでこないことを苦しんだ。けれどもペンをとると一気に十枚ばかり書いた。けれどもこれ以上書けない。これだけでは兄の詩集をけがすに過ぎぬ。一つは兄が私の跋文を紛失させた罪もあるのだが。

とある。せっかく犀星が熱情をかたむけて書いた跋文を朔太郎は紛失してしまった。そしてそれは跋文だけでなかったようだ。

「月に吠える」の原稿を整理する時、僕は鎌倉の旅館海月楼に止宿して居たが、日夏耿之介君が近所に居たので親しく交際した。その原稿が書き上がった時、印刷のために東京に出て来たが、出版の嬉しさと安心とで、すっかりピヤホールで酔っぱらつてしまひ、そのまま大事の原稿をなくしてしまつた。幸ひ備忘のノートがあつたので、改めてまた書き直して出版したが、その爲室生君の序文も一緒に紛失して、二度も同君に執筆をたのむやうな失態を演じた。このことは「失はれた原稿」といふ見出しで、當時方々の新聞や雑誌にゴシップされたが、今となればなつかしい思ひ出の一つである。[5]

自祝のビールに酔って原稿をなくすという朔太郎らしいエピソードだ。北原白秋の序文は序文の末尾に「大正六年一月十日 葛飾の紫烟草舎にて北

原白秋」とあるように、原稿が遅れて届いたので紛失を免れたのだろう。

2つ目の理由は2月21日に突然、発売禁止の内達を受けるという事件のおかげだ。

「月に吠える」はも少しで発売禁止になるところであつた。納本してから九日目に内務省から発行者に向つて直ぐ出頭しろといふ通知があつた。室生君が驚いて行つてみると、一〇三項の「愛隣」といふ詩がいけないから削除せよ、若し書店に配布してしまつたら全部禁止するといふ厳しい命令でもあり、比較的同情ある注意でもあつた。幸ひ製本が遅れたために書店に配布はしてなかつたので、その「愛隣」とそれにつづいた「恋を恋する人」を削除して世に出すことにした。危い事であつた。[8]

と前田夕暮は詳しく書いている。そこで「その筋の注意により「愛隣」「恋を恋する人」の二編（一〇三頁より一〇八頁まで）を削除す。”と断り書きを刷り込み、2編を削除してやっと書店に並んだ。この処分にたいしてもちろん朔太郎は不満で「風俗壊乱の詩とは何ぞ」を「上毛新聞」（大正6年2月25、26日）に発表して抗議している。

ああ風俗壊乱の詩とは何ぞ。この問題は私にとつて思議することの出来ない神秘である。いまはただ改版になつた自分の詩集が、大変お目出度い官許の詩集であるいふ意味のことだけを述べておく。[8]

さてなんとか販売にこぎつけた詩集だが、売上げのほうはというと、刊行部数は500部で、そのうちの約200部を寄贈その他に充てたらしいので、販売したのは残りの300部ほどだが、短期間のうちに売り尽くしてしまった。これは当時の詩の世界では珍しいことで、相当よい売れ行きだった。「萩原の詩集は非常に売れた。東京堂にも一部もない。今再版をする。」と室生犀星は「感情」（第9号大正6年4月）で書いている。若い朔太郎も室生も詩集の売れ行きが好調だったので当然再版を考えたが、経験の豊富な前田夕暮、北原白秋らが「今再版を出しても買ふ人はたいてい買ってしまつたらうから出しても売れなからう。絶版にした方がよからう」とい

う意見だったので、結局再版計画は中止になった。[9]「月に吠える」は都合によって再版を見合わせた。いま東京市中及び各地方に散在する残本合わせて約二十部ほどある。それが無くなると当分絶版にする。”という記事を次の号の「感情」に書くことになった。しかし朔太郎は簡単に思いきれなかった、そして

しかし私の詩の愛好者は、私が当初に豫期したよりも遙かに多数であり且つ熱心でさへあつた。最初市場に出した少数の詩集は、人々によつて手から手へ譲られ奪いあひの有様となつた。古本屋は法外の高價でそれを皆に賣りつけて居た。(古本の時價は最初の定價の五倍にもなつて居た。)私の許へは幾通となく未知の人々から手紙が来た。どうしても再版を出してくれといふ督促の書簡である。

と再版の序で書いているような要望もあり、ついに大正 11 年 3 月にアルス<sup>4</sup>より再版された。再版には、初版で削除された 2 編の詩はそっくり収録された。これは内務省の許可を受けたのではなく、検閲のことなどかまわずに収録したと思われる。ここに朔太郎の詩人としての意地を見ることができる。その他の初版との相違点は、初版は表紙にカバーを掛けたのだが、再版は箱入り、装画は初版が 15 種だったのが再版では 8 種に、献辞は「従兄 萩原榮次郎氏に捧ぐ」が「故田中恭吉の靈に捧ぐ」に差し替えられている点が挙げられる。

## 4 田中恭吉

この發賣禁止事件は、思ふにあの詩集の標題や装幀やが、當時としては甚だ奇警で珍しく、何か妙な異様のショックを役

<sup>4</sup> 北原白秋の弟、北原鉄雄が経営した出版社。1915 年(大正 4 年)に兄北原白秋を顧問に迎えて設立された阿蘭陀書房から、発行されていた美術文芸雑誌『ARS』から名前がとられた。「ARS」とはラテン語で芸術を意味する。兄、北原白秋の『とんぼの眼玉』、『まざあ・ぐうす』、『象の子』三木露風の『パンの笛』などの児童書、童謡集や、『白秋全集』などの文芸書を数多く出版した。アルスの前身阿蘭陀書房は、2 年ほどの経営だったが、森鷗外の『沙羅の木』、上田敏の『小唄』、与謝野晶子の『晶子新集』、そして芥川竜之介の処女出版『羅生門』などの出版をした。



人に与へた爲だと思われる。特にあの田中君や恩地君の挿畫は、何か解らぬながらも直覺的に「怪しい」といふ予感を与へたにちがひない。[6]

しかし前に書いたやうに、著者が自分で装幀するといふことは、仲々やつかいなことでもある。特に繪心のない著者にとって、この仕事は一層に困難である。そこでいちばん善い方法は、自分の藝術をよく理解してくれる畫家を見つけて、一切表装等をたのむのである。私自身の場合で言ふと、処女詩集の『月に吠える』がそれであった。この本の表紙は、當時僕等の同人雑誌「感情」の同人であり、詩人にして畫家を兼ねた恩地孝四郎君にたのみ、中の挿繪や口繪やは、當時畫壇の鬼才と言はれ、日本のピアズレー<sup>5</sup>に譬へられた病畫家の田中恭吉君にたのんだ。二人共僕の詩をよく理解してくれたので、成績は十分以上の出来であった。特に田中君の病的な繪は、内容の詩とびつたり合つて、まことに完全な装幀だつた。[10]

後に朔太郎にこのような回想をさせた版画、装幀はこの詩集にとって、とても重要だつた。ここではあまり知られていない田中恭吉について書いてみたい。朔太郎は雑誌「月映」を見て田中恭吉を知り、雑誌「感情」の同人だつた恩地孝四郎を通じて、『月に吠える』の挿畫を依頼している。田中恭吉にとって恩地孝四郎は肉親を越えた友で、すべてを語り合うことができた。

和歌山に生まれ育つた恭吉は明治 43 年、上野の美術学校受験のため上京してきたが不合格。18 歳の恭吉は来年の受験を目指して、白馬会葵橋洋画研究所で学ぶ。そこの研究所で共に学んだ仲間に、恩地孝四郎と藤森静雄がいた。明治 44 年、ともにめでたく東京美術学校に入学。恭吉は日

<sup>5</sup> ピアズレーにたとえられた恭吉だが、おもしろいことに恭吉の『月に吠える』と、ピアズレーの『サロメ』の間には共通点が多い。[11][12] ♪ 二人とも若くして肺結核で死んでいる。♀ 版画。ピアズレーの繪は黒と白だけの版画のようである。♫ 聖書。『月に吠える』には聖書からの影響を受けた詩があり、『サロメ』は聖書を題材にしてつくられた戯曲である。♬ 発売禁止。『月に吠える』初版は発禁になった（一部分削除して発売）。『サロメ』もピアズレーが挿畫を担当したイギリス訳本が発禁処分になっている。♭ 優れた詩画集として評判が高い。（ワイルド自身『サロメ』はテキスト自体よりも挿繪に重大な意義があると認めたほどである。）

本画科予備科、藤森は西洋画科予備科に、そして恩地は彫刻科塑造部予備科にそれぞれ合格した。まもなく3人は、当時若い芸術家達に圧倒的人気があった竹久夢二宅を、頻りに訪れるようになる。そして夢二の影響によって、3人は版画の世界へと入っていく。そこで「月映」の誕生となるのだが、当時の版画界は、作者である版画家自身の創意によって、表現される制作品は徹頭徹尾、自画、自刻、自摺りでなくてはならないという、主体性確立の芸術論、「創作版画」が生まれつつあった。しかし世の理解が洋画、日本画の肉筆タブローを「本画」としていたのに対し、版画は遥かに評価が低く「半画」と軽蔑されていた時代だった。[13] そのような風潮に反発した恩地孝四郎、藤森静雄、田中恭吉は三人の同人結社を作り、批判者の鼻をあかしてやろうと決意した。結社の名前を決めたのは恭吉だった。

なまへをはやくとりきめて、さて安心して刀をとりたいと思ふ。「月映(つくはえ)」はどう? わたしは月映といふ字づらのすっきりしたのが好ましい。(3月22日)

どうしてもいいものがいま二枚出来る筈なんだから。名はつくはえにしませう、ね。しづを(藤森静雄)もさう言っていたから。(3月23日)

と恩地に手紙を出している。[13] この恭吉の提案通り同人誌名、結社名は「月映」と決まった。大正3年3月、私輯「月映」第1号は3部だけ発行され、3人が1組ずつを所有した。しかしさあこれから、というときに恭吉は病に倒れ帰郷する。結核だった。そこで私輯「月映」は第6号をもって終わりとし、月刊「月映」の公刊を準備する事になった。恩地と藤森は、恭吉の身を案じながら東京で、雑誌づくりに懸命になった。恭吉も病に倒れながらも、2人にあてて細々と編集についての提案を書き送った。自刻版画集「月映」の公刊第1号は、大正3年9月18日発行された。限定200部発行で、定価30銭、表紙に1から200までの発行番号を付していた。出版社は竹久夢二のほとんどの画集の版元である洛陽堂で、夢二の口添え無くしてはできなかつたと思われる。「月映」が置かれた店は、竹久夢二の港屋のほかには東京堂など数件にすぎず、案の定売れなかつた。恩地の回

想の中でも\十一部しか売れないことがあった。” [13] との記述があるほどだ。

しかしその「月映」を見た朔太郎は、恩地孝四郎を介して、恭吉への『月に吠える』の挿画の打診を始めることになったのだ。その依頼に対して恭吉は朔太郎の信頼を喜びながらも刀をとれない病気の状態のため、ペン画でというならできる旨の承諾を書き、「原詩に執しないわがままな画を挿みたい。」と書き添えている。また恩地には「百枚の予稿を作りその中から二十から三十の絵を選んで美しいものとしたい」とも書いている。しかしやっと5枚ほどの画稿がまとまったのも束の間、病状は急変し誰の目にも最悪の相を呈した。病む恭吉は恩地に宛てて、力を振り絞って最後の手紙を書いている。

萩原氏には面接または消息の筋挿画のことお断りしてほしい。  
私はどうも筆をとれない。私の熱四十度を今二、三度でれば私の脈百四十を二、三十でれば私は亡くなる。私はいますべてをすてて健康を欲している。

私はいま氏にこの‘お断り’をするのに不徳義を感じず。けれども氏の詩集の出版間際の出来事よりはいい事と思って許していただきたい、旨をつたえてほしい。 [13]

恭吉は「月映」の第7集<sup>6</sup>を待たずに8月に死んだ。しかしこの断りは朔太郎には伝えられていなかった。恩地は今までの恭吉の病状経過からして、再びペンを取れる日が来ると考えていたのだ。それで、恭吉の死を伝えられたときの朔太郎は

全くがっかりしてしまひました。此の上は全然今迄の計画を代へるより仕方ありません。それにしても田中氏のやうな天才が夭死したといふことは此の国の芸術界にとって大恨事でした。 [13]

と恩地に書いたように、失望は大きかった。『月に吠える』の挿画、装幀の計画は振り出しに戻った。しかし恭吉の従兄山本俊一が、恩地の依頼を

---

<sup>6</sup> 恭吉の死によって終刊になった。

受け恭吉の遺品の中から、画稿らしきものを送り届けてくれたことによって、頓挫していた『月に吠える』の挿画、装幀の計画は復活する。それは赤い葉包紙に、赤インクで書かれた13枚の絵だった。

恭吉のかき遺したものは殆どありませんでした。古いのも新しいのもごっちゃに集めても極めて少力で、それも半端なものです。ただ、萩原氏詩集の挿画と見られる小さな赤い紙にかいた画だけが、机の引出から出ました。[13]

山本俊一から恩地孝四郎にあてられた手紙にはこうある。

また朔太郎は恭吉の挿画を使うこと装幀について、恩地に相談の手紙を書いている。

今度の詩集は故田中恭吉氏の追悼記念の意をかねた出版ですからこれは兄にもご承知願ひます。その意味からも特に田中氏の親友であり月映の同人であった大兄に表装その他のご迷惑をお願ひする次第です。[13]

もちろん恩地は快く引き受け、朔太郎の処女詩集はついに大正6年2月刊行されたのである。「朔太郎兄 私の肉體の分解が遠くないといふ豫覚が私の手を着實に働かせて呉れました。兄の詩集の上梓されるところ私の影がどこにあるのかと思ふさえ微笑されるのです。」の言葉を残して去った恭吉には、この名詩集に自分の名が永久に記されるなどと、思いも及ばなかったことだろう。

## 5 明治大学と萩原朔太郎

最後に明治大学と朔太郎について、述べておきたい。はじめに朔太郎が明治大学で講師をしていたと書いたが、あまり知られていない。朔太郎は明治大学の文科部文芸科の講師を昭和9年7月から病に倒れる直前の17年4月までつとめた。「名前ばかり仰々しくて、何の役にも立たないものだ」と書いたこともあり、大学講師というものに対して、あまりいい印象を持っていなかった朔太郎が、教壇に立つきっかけは何だったのか。実

は朔太郎が教えた日本文韻研究という科目は、もともと室生犀星が担当だった。

「室生さんは大勢の前で話をしたことが全くないけれども、山本（有三）先生だとか吉田（甲子太郎）先生からすすめられて、どうしてもことわりきれずに、まあ出ようと決心されたそうです。そのため着たこともない洋服をわざわざ作って、来られましたよ。しかも参考書をたくさん風呂敷に包んで持ってね。」

「本の間に紙をはさんで、いつでも使えるように」

「そうそう。先生は震えておられましたね。ぼくははじめ酒かなにかのせいかと思ったけれど、あとで知ったのですが、大勢の前で話が出来ないと言うんで、一回きりでやめられたんです。記念すべき授業になってしまったわけです。」

（中略）

「だけど一回やってみてとても駄目だとわかってそれではだれかを推薦してくれということ、たしか萩原さんを推薦されたみたいですね。」[14]

親友であった室生犀星の代打としての出講だった。初めて教壇にたった時のことを、朔太郎自身も「学校教師の話」という題で書いている。

明治大学の吉田甲子太郎氏<sup>7</sup>に引っぱり出されて、一昨年からは無理矢理に教壇に立たされた。初めて教壇に立つたときは心細かった。同じ大学の教壇で、室生犀星君がひつくり返つたといふ話をきいたので、よけいに怖いやうな気がして、足がふるふるした。でもどうにかごまかして最初の一時間の授業を終わつた。後で生徒に所感をきたら、早口でわからんからもつとゆつくり言ってくれと言つた。その筈である。ノートに書いていつた教材を、ペラペラ素讀したのである。自分でも何を言つたのか解らなかつた。[15]

<sup>7</sup> 明治大学教授。初代文芸科幹事。英文学を担当し、オー・ヘンリー、アンダスンらの作家研究を指導した。児童文学者、翻訳家としての業績は高い評価をされている。

朔太郎の緊張している様子が、よく伝わってくる文章だ。朔太郎が、犀星のように一回の講義で辞めることなく、講師を続けることができたのは、素朴な犀星とモダンな朔太郎の性格の違いが関係あったかもしれない。著書『詩の原理』を教科書として使った授業に対する学生の評判もよかったのではないか。ただ大学講師になっても朔太郎は朔太郎であった。

明大には十七年の三月まで講師を務めていたのだが、あわてものの父なので休日や休暇に行き先が一人もいなかったということはたびたびであった。会合の時などもやはり同じで、早くから用意して行ったのに日や時間を間違えて行き、もう皆が帰った後などというのはたびたびだった。[16]

と、このとおりである。

大学教師の持つ肩書きは、彼にとってはとても役立ったようだ。今まで名乗ってきた著作業に比べ、教師は、現在でもそうだが特に当時は、名の通りがよかった。朔太郎は戸籍調べの巡査に、いままでしつこく尋問されていてうんざりしていたが、大学の講師もしていると答えたところ、巡査の態度が一変しその後は来なくなったという。他にもある。

も一つ都合が好いのは、旅で宿屋に泊る時である。以前は無職と書いたが、何か番頭が變な目で見ると思はれ、不愉快の事が多いので、その後はやはり著述業と書いた。しかし前に述べたやうな理由で、これもあまり好遇されず、多少嫌疑の目で見られる。といつて社員などとデタラメを書くわけにも行かんし、況んや文士だの詩人だのと宿帳に書くほど馬鹿でもないの、實に困りきつて居たのであるが、學校へ行くやうになつてから、大威張りで教師と書ける。これは全くありがたい役得であり、その度毎に吉田甲子太郎氏には感謝してゐる。[15]

当時著述業といえは世間では、インチキの刊行物を発行して、人にゆすりたかりをしたり、いかさま商品の押し売り広告を書いたりという、どうもまともでない選挙ブローカーや、政治ゴロのような連中が著述業の看板を挙げているくらいに受け止められていたらしい。交番で不審尋問を受け

るとき、著述業と答えるとよけいに尋問が厳しくなるので、朔太郎は明大講師と書いた名刺を作り持つようにし、おかげですぐに釈放されていたようだ。[16] しかし朔太郎は大学講師になっても夜ふらついて、警察のご厄介になるのは変わらなかったのである。

朔太郎は7年以上つとめた明治大学に愛校心を持っていたと信じたい。明治と朔太郎の仲をあらわす事例に、明治大学応援歌「紫紺の旗」がある。昭和16年の11月の商科同窓会誌には「母校に新応援歌誕生す」[17]という記事が掲載されている。その応援歌、『紫紺の旗』は明大応援指導部が作詞しているが、補導者として萩原朔太郎の名前がある。きっと応援指導部と一緒に作詞をし、明大への思いが込められた歌詞を、作りあげたのだろう。歌詞のどこかに朔太郎の思いがこめられているのではないか。

萩原朔太郎を身近に感じることでただけでも、私にとってこの原稿を書くことは大きな収穫になった。この文章は、飯沢氏、奥村氏、中林氏その他の大勢の方の、ご協力、援助なしには、書き上げることはできなかった。心より感謝します。

## 参考文献

- [1] 川島幸希著「献呈・識語のある初版本(34)」『日本古書通信』日本古書通信社 第820号 p15 平成9年11月 [ P020/42//H,P020/2//W 他 ]
- [2] 明治大学文学部50年史編纂委員会編『明治大学文学部50年史』明治大学文学部 昭和58年3月 [ 377.2/268//H,377/188//S,377/429//W 他 ]
- [3] 三好達治著「文学的青春伝」『三好達治全集 第9巻』筑摩書房 昭和40年4月 [ 918/135//W,918.6/97//HZ ]
- [4] 鈴木貞美編『年表作家読本 梶井基次郎』河出書房新社 平成7年10月 [ 910/437//S,910/5183//W ]

- [5] 近代文藝復刻叢刊『感情』冬至書房 昭和 35 年  
[ 180/59//L,P911/122//HZ ]
- [6] 萩原朔太郎著「詩壇に出た頃」『萩原朔太郎全集 第 4 巻』新潮社 昭和 35 年 5 月 [ 918.6/89//H,918/23//S,918/148//W ]
- [7] 伊藤信吉著「『月に吠える』の出版をめぐる」『月刊本の手帖』昭森社 3(10) p695 昭和 38 年 10 月 [ P020/7//HZ(A04F1) ]
- [8] 伊藤信吉著「『月に吠える』の出版をめぐる(2)」『月刊本の手帖』昭森社 3(11) p777 昭和 38 年 11 月 [ P020/7//HZ(A04F1) ]
- [9] 伊藤信吉著「『月に吠える』の出版をめぐる(3)」『月刊本の手帖』昭森社 3(12) p850 昭和 38 年 12 月 [ P020/7//HZ(A04F1) ]
- [10] 萩原朔太郎著「自著の装幀について」『萩原朔太郎全集 第 4 巻』新潮社 昭和 35 年 5 月 [ 918.6/89//H,918/23//S,918/148//W ]
- [11] 山田勝編『オスカーワイルド事典：イギリス世紀末大百科』北星堂書店 平成 9 年 10 月 [ R930/83//H,930/1045//K,R930/64//W ]
- [12] 『アールヌーヴォーの世界 4 ピアズリーとロンドン：黒の曲線』学習研究社 昭和 62 年 9 月 [ 708/10//S,708/29//W ]
- [13] 澤田伊四郎編『田中恭吉 太陽と花』龍星閣 昭和 57 年 12 月
- [14] 明治大学文学部五十年史編纂準備委員会編『明治大学文学部五十年史資料叢書 大木先生と文芸科時代』明治大学文学部 昭和 54 年 3 月 [ 377.2/186//H,377/156//S,377/358//W 他 ]
- [15] 萩原朔太郎著「学校教師の話」『萩原朔太郎全集 第 4 巻』新潮社 昭和 35 年 5 月 [ 918.6/89//H,918/23//S,918/148//W ]
- [16] 萩原葉子著『父・萩原朔太郎』筑摩書房 昭和 34 年 11 月 [ 910/268//W ]
- [17] 商科同窓會本部編「母校に新応援歌誕生す」『商科同窓會誌』商科同窓會本部 第 8 号 p21 昭和 16 年 11 月 [ 090.8/34//H ]